

満足の音色を追及する飛驒唯一の職人

手作りのパイプなどに こだわり続けて40年



「多くの人にパイプオルガンを聞いてほしい」と話す田尻さん

平成29年10月29日、福岡市早良区の「西南学院バプテスト教会」で新作のパイプオルガンが荘厳な音色を響かせました。
製作者は田尻隆二さん。一から手作りでパイプオルガンを作り上げる職人です。

来場者がパイプオルガンの演奏に合わせて讃美歌を歌うと「製作者の手によって生み出されたオルガンは、多くの人の手によって成長します。礼拝のみならず、多くの人に聞いてもらいたい」と思いがよぎったそうです。



西南学院バプテスト教会のパイプオルガンで妻靖子さんと

パイプオルガンは、鉛とスズを溶かして作られた長さの違う笛（パイプ）に風（空気）を送り、ストップと呼ばれる音色を変える装置と鍵盤を操作しながら奏でる楽器です。
今回製作したのはパイプだけでも大小合わせて750本も。中には最大で長さ2.5mもあります。パイプ以外にも多くの部品から作られますが、完成に5年を要したことは田尻さん自身も経験したことがないそうです。「今までの製作人生の積み重ねでようやく製作できました」と振り返ります。
子どものころから音楽が好きだった田尻さん。大学卒業後、日本のパイプオルガン製作の草分け・辻宏さんの工房に弟子入りしました。その後、工房が岐阜県白川町に移転したことを機に移住。その町で音楽教師として働いていた妻・靖子さんと縁があり結婚しました。

昭和61年に独立。靖子さんの実家がある高山市で工房を構え、今に至ります。
これまでに、岐阜市のサラマンカホールに設置されたパイプオルガンの2,700本をはじめ、パイプのみの製作を担当した楽器は多数ありましたが、設計から仕上げまでを手掛けた楽器は福岡のものが10台目。既成の部品に楽器を合わせるのではなく、楽器に合わせて部品を作った結果です。

「国内で活躍する製作者のうち、パイプから手作りするの私を含め数人しかいません。なぜなら工程が複雑ですし、輸入品を買った方が効率的ですから。ですが私は、パイプの手作りにこだわり続けたい」と微笑みます。

田尻さんは「これから何台製作できるか分からないが、手作りへのこだわりを守り続けたい」と語り、今日も作業を続けます。作り手の思いが詰まったパイプオルガン。ぜひ機会があったら音色を聴いてみませんか。

東京都世田谷区出身。大学卒業後、パイプオルガン製作者の草分け・辻宏さんに弟子入り。工房が岐阜県白川町に移転したことを機に県内へ移住。昭和61年に独立し、妻の実家の上岡本町へ工房を構えた。68歳。